

## 壮年期世代のペット喪失感情について (2) —喪失からの人格的成長、こころの再建について—

Feelings associated with losing a pet by adults: (2)  
— Analyzing Personal Growth from the Perspectives of Loss and Mental Reconstruction —

松田光恵\*  
Mitsue MATSUDA

### Abstract

In this paper, we focused on the relationship between people in their late middle age and the loss of a pet as the target loss. Accordingly, we conducted interviews to explore the impact of losing a pet. Although the results revealed no severe reactions due to pet loss, which concurred with results of previous findings, detailed factors that reinforce personal growth and mental reconstruction were evident. In relation to personal growth, it was revealed that a new consciousness was emerging, including changes in views of life and death, enhancing the spirit of kindness to animals, adopting pets from foster parents or shelters, and the desire to protect a new life. These are aspects of personal growth that result from living with a pet. In relation to mental reconstruction, it was felt that the death of a pet allowed one to reconfirm the bond with one's family, partner, and receptive others. It was also indicated that pets play the role of a social lubricant. Late middle age may be regarded as a period when one strives to work and raise children. These social roles also allow one to immerse oneself in other things that make life worthwhile. These social roles are beneficial in mental reconstruction as factors that help one recover from sorrow.

Keywords: ペット、ペットロス、対象喪失、悲嘆の過程、モーニングプロセス、ライフサイクル

### I. 問題

新島(2011)はペットロスが深刻化する背景には、社会的要因やペットの存在がヒトの役割に変わってきていることが関係していると述べており、その原因は社会全体の高齢化・都市化、およびペットの伴侶化・家族化であるとしている。また、ペットの役割とは人間の役割を凝縮し、理想化したものに類似しており、至って多義的であるとしている。しかしその多義性ゆえに、ペットロスを経験した飼い主を取り巻く周囲の他者には、飼い主が感じているペットの存在意義の大きさが理解されず、周囲の他者の無理解からペットロスの悲嘆は深刻化しやすい。これらを防ぐためには、ペットの果たす役割の多様な側面、つまり多義性を社会が理解することが必要である。

ペットロスとは、経験者にとって深刻な問題である。木村(2009)の調査では、ペット喪失直後の飼い主の56.1%が神経症に相当する症状を呈するなど、社会的支援や環境の整備の必要性を示唆している。このようにある一定数ペットロスにより重篤化する人がいることは見過すことのできない事案である。

一方で、悲嘆のプロセスを経験し、乗り越えることは人格的成長を遂げることに繋がるとされている(A.デーケン, 1983b)。このような喪失経験後の調査では、人格的成長について(濱野, 2020)、人間的成長について(東村, 2001)、有益性発見について(坂口, 2002)など、実証的研究の知見が見られるが、未だ十分とは言えない。

\*くらしき作陽大学子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

## II. 目的

エリクソン (1950) はライフサイクル論の中で壮年期の発達課題とは「ジェネラティビティvs停滞」としている。この課題を乗り越えて、「世話」の獲得となる。ジェネラティビティとは「生殖性」または「世代性」「世代継承性」という訳で理解されている。また、この時期には、「自分に固執しない能力」が不可欠である、とされている。これらは「自分という存在を必要とされるからこそ喚起される力」とされ、喩えれば、非力な赤ん坊が自分の生命を親に預け、家族全体にコントロールされ育てられると同時に、赤ん坊が家族全体をコントロールし、家族を育てている、ということである。無力な赤ん坊との非対等な関係性において、非対等でなければ引き出せない力がある (谷村, 1999) という考え方であり、ペットと、その生殺与奪の力を持つ飼い主はまさにこの関係性にあたるであろう。

壮年期は人生において総まとめの入り口であり、その時期のペット喪失体験はさらなる人間的成長への一要因になるのではないか。エリクソンのライフサイクルが示すように、人は生涯を通して発達し続けるもの (谷村, 1999) である。本研究の目的は、壮年期世代がペットロスといった対象喪失体験をした場合の心理的過程を質的・探索的に分析するものである。インタビュー調査を行い、その喪失体験をどのように受け止め、解釈し、現在に至るのかについて調査を行う。

## III. 方法

### 1. インタビュー対象者

2019年1月から3月、ペットを喪失した経験を持つ男女9名 (男性2名、女性7名、平均年齢46.9歳) を対象にインタビュー調査を実施した。調査対象者の経歴は主婦、会社員、webデザイナーなど様々であった。喪失したペットの種類の内訳は犬8頭、猫1頭であった。

### 2. 手続き

調査は筆者と対象者の1対1で、半構造化インタビューを行った。インタビュー前に、インフォームド・コンセントとして研究の趣旨と倫理を説明し、インタビュー途中で的中断や辞退も可能である旨を説明した。知り得た情報は本研究以外では使用せず、匿名で扱うことを説明した上で協力賛同の意思を確認した。その後、静かなカフェなどの場を選び、和やかにインタビューを行った。所要時間は概ね45分～1時間程度とし、質問項目に沿いインタビューをすすめた。インタビュー内容の質といった点から、感情が高ぶり、涙があふれる場面も想像されたため、なるべくリラックスして素直に話ができるような状況づくりを心がけた。録音機器使用の許可をいただき、インタビュー後逐語録を作成し、プリントアウトした後、プライバシー保護の観点から録音の消去を約束し実行した。

### 3. 質問項目

質問項目は全部で23項目である。被験者の属性を尋ね、<1.回顧><2.ペットとの関係><3.死因・喪失前後の感情><4.モーニング可能な条件><5.喪失後の感情><6.未来について>の6概念で質問を構成した。実際の質問内容は朝比奈 (2003) を参考にし、独自に作成したものを用いた。以下、その質問項目を記す。<1.回顧><2.ペットとの関係>に係る質問Q1～Q11は「壮年期世代のペット喪失感情について (1)」 (松田, 2019) に記載しているので参考にされたい。

<3.死因・喪失前後の感情>Q12.ペットの喪失原因、Q13.ペットの最後を看取れたか

<4.モーニング可能な条件>Q14.働きかけの方向と内容

<5.喪失後の感情>Q15.ロス後の感情、Q16.悲しみへの反応、Q17.死後のペットの位置づけ、Q18.ペットの死後の変化

<6.未来について>Q19.この先ペットを飼いたいのか、Q20.子どもにペットを飼わせたいのか、その際ペットに何を期待するか、Q21.心の支えになったもの、Q22.ペットから受け取ったもの、Q23.今どのような絆があるか、の12項目である。本稿では上記概念3.～6.Q12～Q23の結果を報告する (その他の前半部概念1. 2.の結果は、松田 (2019) を参照)。

#### 4. 分析方法

本調査では半構造化インタビューを行った。予め設定した調査概念に基づき質問を構成し、インタビューで得られた語りをとりあげ、発言の内容を文章データに起こし、質的に分析した。ペット喪失前後の感情の変化、モーニングワーク可能な条件、喪失後の感情、未来に向けての死の受容、ペットから受け取ったもの、など、悲哀の過程に着目して分析を行った。質問項目に沿いなるべく回答者主導で自由に回答してもらった。例えば分析中に出現する、ポジティブかネガティブか、の判別は筆者が行うのではなく、自身の判断に任せ、その関わりを対象者がどうとらえているかに注目した。

### IV.結果

<3.死因・喪失前後の感情> ペットの死因や、喪失の前と死に直面した際にどのような感情であったかを尋ねた。

#### Q12.ペットの喪失原因

多くが病死であり、その他は事故死であった。高齢のペットの場合、老衰から病死に至る場合がほとんどであった。事故死の場合は、飼い主が留守の間に不織布、ティッシュなどを誤飲し腸閉塞を起こしたため、また飼い主のミスから猫を戸外に出してしまいその後交通事故にあった、など人的ミスに起因するものであった(表1参照)。ペット喪失前の飼い主の感情として、死に至るまでの闘病期間はペットが自分の死を予感しているようで自分も不安だった、あるいは、両者覚悟ができていたと思う、などの回答が得られた。死を予期し動揺し、またはその先を見越して覚悟を決め、ペットと接している様子が分かった。

#### Q13.ペットの最期を看取れたか

次に看取りの有無を尋ねたところ、9人中「看取った」と回答した者は4名で、自宅で最期を看取るケースが多く、中には病院で最期の看取りをしたとの回答があった。5名は「看取れなかった」と回答し、交通事故だった、仕事に出ている間に死んでしまった、居眠りをしている間に逝ってしまった、などの回答であった。その場合、ペット喪失直後の飼い主の感情として、罪悪感や心残りがあ、などの感情を抱いていた(表1参照)。未練や後悔、懺悔の様子が見られた(詳細は付録\_1参照)。

<4.モーニング可能な条件> ペットの死に際して他者からどのような働きかけがあったか、また自分からどのような働きかけをしたかなどを尋ねた。

#### Q14.働きかけの方向

他者からの働きかけとして、「Q14-1.家族からの働きかけ」では家族全員が悲しんだ、姉妹から、夫から両親から慰められた、それぞれ悲しく皆でいたわりあう感じがした、との回答であった。「Q14-

表\_1 ペットの死因・看取りの有無

	生存期間	死因		看取りの有無
Aさん	15年5ヶ月	病死	肺水腫	有
Bさん	11年1ヶ月	病死	脂肪肉腫	有
Cさん	15年5ヶ月	病死	血液に肉腫が出来た	有
Dさん	4年3か月	病死	リンパ腫瘍	無
Eさん	14年	事故死	誤飲による腸閉塞	有
Fさん	15年4ヶ月	病死	腎臓病	無
Gさん	15年4ヶ月	病死	頸椎ヘルニアの発作、四肢麻痺に。腎臓の状態が悪いため寝たきりになり、衰弱した	無
Hさん	4年10ヶ月	事故死	交通事故	無
Iさん	13年	病死	メラノーマによる癌	無

2.友人から」友人からお花や電話をもらった、同様の経験をしている友人の声掛けが心の支えとなった、話をずっと聞いてくれた、などであった。「Q14-3.その他から」行きつけのお店、動物病院からお悔やみの言葉、ネットでつながっている人から気遣いの言葉がけがあった、との回答が得られた。自分からの働きかけとして、「Q14-4.家族へ」泣いたり悲しむ子や親への心のケアなどに苦心した、悲しむ親のために新しい犬を迎えた、「Q14-5.相互」今までのようにふるまいたい、悲しみを引きずったままではいたくないと話し合った、との回答もあった。

ペットの死も、人の死と同様の感情に溢れており、周りの反応や関わりも然りである。今まで見たことのない家族の姿をペットの死によって認識した、という回答もあった。悲嘆からの回復には他者との関わりが必要である。悲しみを一人で抱え込むのではなく、気持ちを共感してもらえる他者からの声かけや気遣いが心の支えとなり、悲しみから立ち直り、こころは再建する（付録\_2参照）。

<5.喪失後の感情> ペット喪失後の感情や反応を尋ねた。また、死によってペットの自分の中での位置づけは変化したのか、生活の中で何か変化はあったか、などを尋ねた。

Q15.ロス後の感情

ペットを喪ってからどのような気持ち、感情だったかを尋ねた。後悔、恐怖、辛い、眠れない、心の整理、覚悟、怒り、無気力、虚無感、非現実的、空虚感などの感情が見られた（表\_2、付録\_3参照）。

Q16.悲しみの反応

ペット喪失後の反応を、ネガティブかポジティブかで回答してもらい、その理由を尋ねた。ネガティブも多いがポジティブな反応もあった。ネガティブ反応としては後悔、無気力、虚無感を味わうであった。ポジティブ反応は死ぬことでもう苦しくない、という安堵感、自分も看病から解放され楽になった、とする満足感、開放感であった。または死を受容し、感謝しているという回答もあった（表\_3、付録\_4参照）。

表\_2 ロス後の感情

Aさん	火葬までが辛かった／形が無くなることの恐怖／心の整理を付けた／他の犬で気が紛れた
Bさん	病気を見つけてあげられなかったことを後悔／有害物質が入っていた、というメーカーのものを食べさせていたのでそのせいで病気になったのではないかと、という後悔／同時に楽になれてよかった、安堵
Cさん	亡くなる直前は、ついにきたか、との思い／覚悟のうえ／死ぬ間際までこれまでの思い出をずっと語りかけた
Dさん	ずっと後悔があった／他に色々な治療の選択があったのではないかと、もっとしてあげられることがあったように思う
Eさん	他の病院に連れて行けばよかったという後悔／病院がしっかりしていればとの怒り／頑張る気力が全てなくなった／存在がこんなに大きいとは思わなかった／いつ死んでもいい、側に行きたい、虚無感
Fさん	何も考えられないまま火葬／残された犬とパートナーの悲しそうな顔を見るにつれ、現実なんだと実感
Gさん	後悔／最初ママには勝てないな、とも思った(命日が、最初の飼い主さんと同じだった)
Hさん	あの時こうしていれば、結果は違ったかと思う、後悔／死んだ道を通るたび、ああ、ここで、はねられたのだな、と考えてしまう
Iさん	もういないという空虚感

表\_3 悲しみの反応

	P/N	反応
Aさん	ネガティブ	後悔
Bさん	ネガティブ	後悔／安堵
Cさん	ポジティブ	安堵／満足感／解放感
Dさん	ネガティブ	後悔
Eさん	ネガティブ	無気力／虚無感／他のことに集中／引きこもり
Fさん	ネガティブ	後悔
Gさん	ネガティブ	後悔
Hさん	ネガティブ	沢山の後悔／感謝
Iさん	ネガティブ	虚無感

Q17.死後のペットの位置づけ

死後のペットの位置づけを、ネガティブかポジティブかで回答してもらい、その理由を尋ねた。多くはポジティブな反応であるが、ネガティブや「何も思わない」などのニュートラル反応もあった。

ペットの位置づけとは、特別な存在、守ってくれる存在、スーパーアイドルや象徴の喪失、残った人を託されたと感じる、生まれ変わるかも、まだどこかにいそうだ、など想像に思いを馳せることで心の安定を得ている姿が見られた。そう考えることで温かい気持ちになり、自らの心を治癒する手立てであると考えられる。松田 (2019) では生前のペットの位置づけを尋ねたが、多くは“ペットは癒し”であり“家族の一員”、といった回答であったことを考えると、これらの結果は生と死の分断の表れといえるだろう (表\_4 参照)。

表\_4 死後のペットの位置づけ

	P/N	ペット死後の位置づけ
Aさん	ポジティブ	特別な存在
Bさん	ポジティブ	天国で楽しくしているはず。見守ってしてくれる
Cさん	ネガティブ	スーパーアイドルがいなくなった。家にぽっかりと穴があった
Dさん	ネガティブ	象徴がいなくなった
Eさん	ニュートラル	何も思わない
Fさん	ポジティブ	ポジティブに考えるようにしている
Gさん	ポジティブ	パートナーと後住犬のことを、自分はこじろうに託されたのかもしれない
Hさん	ポジティブ	いい思い出しか浮かばない。息子から、「可愛がっているペットが死んだら、生まれ変わる」といわれそんな気もする
Iさん	ポジティブ	まだどこかに居そうで、死んだと思いたくような気がする

Q18.ペット死後の変化

ペット死後の自らの変化を、外的反応、内的反応に分け、表面上や行動の変化として「Q18-1.外的変化」、感情や内面の変化として「Q18-2.内的変化」を尋ねた。

外的変化では変わらない、いない現実を突きつけられた、他人の前で普通にすることが辛い、引きこもった、パートナーと仲良くなった、お世話する対象がいなくなった、と様々な回答が得られた。内的変化では、いないことが不思議、思い出して泣く、変わらずずっと好き、残された犬の健康を気

にかけようになった、涙もろくなった、死生観の変化が起こった、などであった（表\_5、付録\_5参照）。

表\_5 ペット死後の変化

	Q18-1.外的変化	Q18-2.内的変化
Aさん	変わらない	いないことが不思議
Bさん	そばにいないことが現実	泣く
Cさん	変わらない	変わらない。考えない日はない
Dさん	辛い、しんどい	泣く
Eさん	引きこもり生活	親の死より悲しい
Fさん	変わらない	後から迎えた子の健康に気をかけるようになった
Gさん	パートナーと仲良くなることができた	後住犬には出来る限りのことをしたいと思うようになった
Hさん	やることがなくなった	涙もろくなった
Iさん	特にない	死生観の変化

<6.未来について> 新たにペットを飼いたい、我が子にペットを飼わせたいか、その際に期待するものがあるか、またペット喪失にあたり心の支えになったもの、ペットから受け取ったもの、どのような絆があるか、といった未来に関わる事項を尋ねた。

Q19.この先ペットを飼いたいか

この先ペットを飼いたいかを尋ねた。多くは飼いたいという回答であった。その理由は、犬でしか埋まらないさみしさがある、以前のようにまた動物と生活を共にしたい、新たに飼う場合は里親になったり、シェルターから保護犬を引き取る、などの意見が複数見られた。これらは愛するペットを喪失したことにより、生命の尊さ、動物愛護の観点が芽生えたからだと考えられる。大きな意識の変化であろう。

飼えない、という回答では死に際の壮絶さを想起し同じ思いをしたくないから、自分の年齢を考えて最後まで面倒を見る自信がないから、というものであった（表\_6参照）。

表\_6 この先ペットを飼いたいか

	飼う/飼わない	理由
Aさん	飼いたい	どの犬に対しても同じ。犬のいないさみしさは犬でしか埋まらない
Bさん	飼えない	2匹の最期の壮絶さを思うと、踏み切れない。今は無理だ
Cさん	飼えない	今はない。シェルターなどから引き取るのがよいのではない。自分も高齢に差し掛かるので、犬の一生を考えた時に最後まで責任がとれる自信がないから
Dさん	飼いたい	その当時は他の子に気を移すなんて、許されなかった。しかし、犬でしか埋められない隙間があることに気づいた。同じ悲しみを味わうかもしれないが、それでも犬と一緒に生活がしたい
Eさん	飼いたい	また、あ！この子！と思える子と出会った時に、また飼いたいと思う。その時はおそらく保護犬になると思う
Fさん	飼いたい	飼いたい気持ち、飼えない気持ち複雑に入り混じっている。今の置かれている環境を考えると仔犬を迎え入れるのは、難しい
Gさん	飼いたい	死に際の介護も、後住犬の世話も至らないことだらけで、こんな自分が犬を迎えてもいいのかどうかという迷いと、それでも種々の事情が許せば一緒に暮らしたいと思いが混在
Hさん	飼いたい	生まれ変わりに巡り合いたい。里親探などで行先のない子もらって一緒に過ごしたい
Iさん	飼いたい	耐えられず次の犬を迎えてしまった

Q20.子にペットを飼わせたいか、その際ペットに何を期待するか

我が子にペットを飼わせたいかについて、ネガティブかポジティブか、またその際ペットに何を期待するかも尋ねた（付録\_6参照）。結果は半数以上がネガティブな意見であった。ネガティブ意見で

は、子がないので想像できない、期待することはない、命の面倒が見れるか判断がつかない、犬が病気になったらお金もかかる、などであった。ポジティブ意見では、終生飼養の覚悟で面倒を見てほしい、動物とともに暮らすことの恩恵、愛情、責任、を学んでほしいなど、生命あるものを飼育するという覚悟、そこから様々なことを学んでほしい、という回答が見られた。いずれにせよ、ペットを飼うということは、命の尊さ、終生飼養、責任感などを十分に理解しなければならない、ということ自らのペット飼育経験からの学びとしている。これらも大きな利益であろう。

Q21.心の支えになったもの

ペット喪失後の心の支えになったものを尋ねた(付録\_7参照)。写真や肖像画、お骨をペンダントに入れて持ち歩く、といった思い出の品や、「虹の橋」の話に思いを馳せること、また受容的他者の存在、といった回答が多く挙げられた。物質的な物の他に、家族、パートナー、夫といった受容的他者と沢山ペットの思い出話をし、懐かしみ、泣くという行動を受け止める他者、すなわち精神的な存在が心の支えになっていた。

Q22.ペットから受け取ったもの

ペットから受け取ったものは何か、それらについての反応はネガティブかポジティブかを尋ねた(表\_7参照)。回答は全員ポジティブであった。その内容として、観念的なものでは、幸せ、愛情、大切な思い出、やさしさ、穏やかさ、などが挙げられた。また実在的なものでは、人間関係、友人、家族の団結、などが挙げられた。ペットとの生活を通じて大きな愛情が得られること、またそこからペットを介しての人間関係にまで発展する、と捉えられている。ペットがもたらす効果としては、心理的利点、身体的利点、社会的利点があるとされているが(濱野, 2020) 家族をつなぎ、人をつなぐことはペット飼養の大きな利点と言えるだろう。また生命観・人生観などに変化が生じており、ペットの死をきっかけにして新たな意識が芽生えが示されている。

表\_7 ペットから受け取ったもの

	P/N	受け取ったもの
Aさん	ポジティブ	幸せ
Bさん	ポジティブ	大切な思い出、愛。犬のおかげで友人もできた
Cさん	ポジティブ	人間関係。友人
Dさん	ポジティブ	愛情、やさしさ、穏やかさ。家族が一致団結すること
Eさん	ポジティブ	言葉では言い表せないほどの大きな愛情
Fさん	ポジティブ	人間関係。犬が縁でつながったひとが沢山いる
Gさん	ポジティブ	「犬を飼う」「ちゃんと最後まで面倒をみる」ということはどういうことなのかを、彼は教えてくれた。老犬と過ごす時間はすごく愛おしいということも知ることができた
Hさん	ポジティブ	気を付けて、今後を生きろと言っているのかもしれない
Iさん	ポジティブ	沢山の愛情

Q23.今どのような絆があるか

ペットとどのような絆があるか、の問いには、写真を飾る、写真に話しかける、鑑札やリードなど生きていたという証、メモリアルペンダントにお骨、遺毛を入れ持ち歩く、であった。生前を思い起こさせる写真や象徴的な物、または体の一部に接することで忘れたくない、一緒にいる、という感覚になれる。回答には、喪ったペットを忘れたくないという思いが現れており、現実には触れ合うことはできないが、想像の中で、心の中でいつでも会える、という思いが認められた(付録\_8参照)。

## V. 考察

本調査では壮年期世代のペット喪失後の影響を調べた。対象者らは失ったペットと愛着をもって過ごしてきており、喪失後の経過年数はそれぞれ異なるが、ペットロスによる重篤な反応は見られなかった。これまでの知見の結果とほぼ似通った様相であるが、人格的成長やこころの再建を補強する詳細な要因が見られた。

A.デーケン(1983, 1986a)は、悲嘆のプロセスを通じて喪失の苦悩を克服した人は、以前にも増して円熟した人格者になるとし、喪失経験後に醸成される他者との共感能力、残された人生の大切さを享受し、残された人生がより豊かなものになる、と説いた。本調査でも死生観の変化、動物愛護精神の強化、次に新しいペットを迎えるときは里親探しや保護施設から引き取り、少しでも小さな命を守りたい、などの新たな意識が芽生えていることが分かった。これらはペットと暮らしたことから生まれる人格的成長の一側面である。ペットとの生活が安定しており、愛着が安定していれば、ペットロス経験をしたとしても人間的成長を遂げる事が明らかになっており(濱野, 2020)、今回の調査でも同様の結果が示唆された。

モーニング(持続的な悲哀)に関して特徴的なことは、受容的他者の存在、社会的役割、があげられる。対象者らはペットの死によって家族やパートナー、受容的他者との絆を再確認できた、と感じていた。これはペットが社会的潤滑油の役割を担っていることの表れでもある。また、壮年期世代は仕事や子育てに奮闘する時期である。これら社会的な役割があることで悲しみながらも生活の中で別の生きがいに没頭することができる。これらが悲哀から立ち直る一要因としてこころの再建に役立っていると考えられる。

本調査でCさんは喪失後の感情として「覚悟ができていたのでほっとしているし、すっきりしている。楽にしてあげられたと思うし、自分も介護から解放され楽になった」と話していた。愛犬が病にかかった際、その重篤性と犬の年齢から死に対する覚悟が既にできていた。平山(1997)は予期悲嘆を経験すると死別以前にある程度の心の準備ができるため、喪失体験後の回復が比較的早い、と述べており、この回答者の場合はまさに予期悲嘆を経験していたため、喪失後の悲嘆が緩和され、安堵感・解放感を経験したと考えられる。

また谷村(1999)は、「自分をかまわず、情熱的、献身的に自分の存在を必要とするもののために奉仕する、という一面がジェネラティビティにはある」としている。ペットを溺愛する飼い主とペットとの関係はまさに、ジェネラティビティの一側面に含まれるだろう。ジェネラティビティの概念は「生殖性」「創造性」「生産性」「教えること」を包含する(谷村, 1999)。ペット喪失体験は、必ず訪れる自分の命の終わりや家族の死について向き合うきっかけとなり、「死の受容」の備えとなる。また死に直面しているむき出しの姿を次世代に見せることは、死への準備教育の側面があり、これらはジェネラティビティ概念の「教えること」に相当する。

ライフサイクルの各世代において、ペットとの関わりや捉え方は異なる。対象喪失体験はそれぞれの意味を持ち、多様な人格的成長を促すだろう。しかし特に壮年期世代にとって、ペットとの関わりは我が子の様だ、と捉えられており、愛着関係にあったペットを喪うことは、ジェネラティビティの課題に大きく関わる事が考えられる。これら葛藤を克服したのちはライフサイクルの次の局面“老年期”「自己統合vs絶望」の発達課題に向かう至極の布石となるだろう。

## 引用・参考文献

- 会田保彦(2011). 死生学とペットロス——歎びと哀しみの果て——ノ瀬正樹・新島典子(編) ヒトと動物の死生学——犬や猫との共生、そして動物倫理 pp61-73.
- Alfons デーケン(1983). 悲嘆のプロセスを通じての人格成長 看護展望, Vol.8 No.10, pp881-885.
- Alfons デーケン・メヂカルフレンド社編集部(編)(1986a). 死を教える 死への準備教育 第1巻 メヂカルフレンド社.



- Alfons デーケン(1986b). 悲嘆のプロセス—残された家族へのケア Alfons デーケン・メヂカルフレンド社(編) 死を看取る 死への準備教育 第2巻 メヂカルフレンド社 pp255-274.
- Alfons デーケン・メヂカルフレンド社編集部(編) (1986c). 死を考える 死への準備教育 第3巻 メヂカルフレンド社.
- 朝比奈千絵(2003). 青少年期における飼育動物の喪失(ペットロス)体験に関する探索的研究 教育臨床心理学研究紀要, 5, pp181-194.
- バーバラ・M・ニューマン, フィリップ・R・ニューマン(著) 福富譲(訳) (1988). [新版]生涯発達心理学 エリクソンによる人間の一生とその可能性 川島書店.
- Bowlby, J.(1980). Attachment and loss. London: HogaryhPress. (黒田実郎・横浜恵三子・吉田恒子(訳) 母子関係の理論Ⅲ:愛情喪失 岩崎岳実出版).
- エリク・H・エリクソン(著) 西平直・中島由恵(訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房.
- 濱野佐代子(2020). 人とペットの心理学 北大路書房.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁(2001). 死別経験による遺族の人的成長 死の臨床, Vol.24 No.1, pp69~74.
- 平山正美(1997). 死別体験者の悲嘆について——主として文献紹介を中心に 松井豊(編) 悲嘆の心理 サイエンス社 pp85-112.
- 門多 真弥・森阪 匡通・亀崎 直樹・大矢 大(2014). アニマルセラピーとしての"イルカ療法":イルカとのふれあいを通じて 発達教育学研究 京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要, 8, pp55-60.
- 木村祐哉(2009). ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方 心身医学, Vol.49 No.5, pp357-362.
- 松田光恵(2019). 壮年期世代のペット喪失感情について(1)——飼い主の語りの探索的分析 回顧を中心に 暮らし作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要, 第52巻第1号, pp35-47.
- 宮本裕子(1998). 遺族への看護 松井豊(編) 悲嘆の心理 サイエンス社 pp168-184.
- 新島典子(2011). ヒトと動物の関係の多義性に自覚的か無自覚か 一之瀬正樹・新島典子(編) ヒトと動物の死生学——犬や猫との共生、そして動物倫理 秋山書店 pp93-97.
- 岡本祐子(1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版.
- Donna Podrazik, Shane Shackford, Louis Becker & Troy Heckert(2000). The Death of a Pet: Implications for Loss and Bereavement Across the Lifespan, *Journal of Personal and Interpersonal Loss*, 5, pp361-395.
- 坂口幸弘(2002). 死別後の心理的プロセスにおける意味の役割——有益性発見に関する検討 心理学研究, 73(3), pp275-580.
- Stroebe, M. S., & Schut, H. (1999). The dual process model of coping with bereavement; Rationale and description. *Death Studies*, 23, pp197-224.
- 谷村千絵(1999). E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察——ライフサイクルとかわりのダイナミズム 教育哲学研究, 1999巻80号, pp48-63.
- 横関祐子(2018). アルフォンス・デーケンの死への準備教育——日本人にとって“死”とは何か? オフィスエム.
- 横山章光(1996). アニマルセラピーとは何か NHKブックス.

付録

付録\_1 ペットの看取りの有無 (Q13)

Aさん	看取った	当日22:00から2時間頑張つて、家に戻っていいと言われたので一旦戻る。病院から呼び戻され、私の顔を見て鳴いた。最後のお別れ、挨拶をしたと思う
Bさん	看取った	家で看取った
Cさん	看取った	死ぬ前の1か月、リビングでずっと一緒に寝た。脳と心臓に酸素がいなくなり、酸素マスクをつけていた
Dさん	看取れなかった	毎晩同じ部屋で寝ていたのに、その日の夜に限って外に出たがった。子どものころから過ごした外の犬小屋のところに。夏の暑い日の夜で、いくら誘っても家に入ってこなかった。仕方がないので蚊取り線香をもくもくと焚き、「じゃあまた明日ね」と別れた。次の日の朝方、父の「ライダーが死んでいる！」の声にベッドから文字通り跳ね起きた。裸足で外にでた。犬小屋の傍で横たわって死んでいた。その死に顔は少し苦しそうに見えた
Eさん	看取った	なんとか看取れた
Fさん	看取れなかった	仕事に出ている間に亡くなっていた
Gさん	看取れなかった	最後の2週間ほどは自宅でケアしてたのだが、二人とも仕事で家を空けている間に旅立っていた。前日の夜に世話をしに行き、声をかけたのが最後だった
Hさん	看取れなかった	発見したときはすでに死んでいた。まだ少し温かみがあったので、そんなに時間は立っていないはず。もう少し、真剣に探していればよかった。翌日、道路に血がこびりついていたので、父とデッキブラシとバケツをもって掃除した。かなりの量の血だった。直ぐ隣の町内の掲示板のところまで、血が飛び散っていた。激しい衝撃だったのだな、と思った。即死だったのだろうか、苦しむ時間が少なければよかったが
Iさん	看取れなかった	最後は一緒に寝ていたが夜中にうとうとしている間に逝ってしまった。きちんと看取れなかったことが心残り

付録\_2 働きかけの方向 (Q14)

	Q14-1.家族から	Q14-2.友人から	Q14-3.他人から	Q14-4.家族へ	Q14-5.相互
Aさん		LINEなどで励ましてくれた。感謝している		ハコちゃん(花ちゃんが死んでから迎えた子)が来てお父さんは嬉しそう。お父さんはハコちゃんが来て変わった。明るくなった	花がいたようにふるまいたい。旦那は天国に行ったからもう言わないで、言っても仕方ないから、という
Bさん		声かけをもらった		子どもが泣くのでケアに必死だった	
Cさん	妹から声かけがあった。しかし甥っ子は小さいので死んだころを見せられなかった	カブリを通じてできた友達から、電話をもらったり、お花をもらったり		みんなが覚悟をしていた	
Dさん	全員、悲しんだ	泣きながら話す、私の話をずっと聞いてくれた	訓練士の人が最後を見に来てくれた。安らかな顔ですね、と言ってくれた。私には苦しそうな顔に見えていたが	みんなが覚悟をしていた	
Eさん	丁度姉のところのワンコも鼻の腫瘍で長くないと言われていたので、まさかとろんが先に逝ってしまうなんて、と共に泣いてくれた。その約一ヶ月後、そのワンコも旅立った。この一年、姉とお互いのワンコのことを話すことが出来たのは、とても助かったなあと今思う	リアルルの友だちも、SNSで仲良くしている方たちも、心配して何度も声をかけてくれた。特にペットの死を経験している方々の声は、大きな支えとなった	よく一緒に連れて行っていたバーやお店のマスター、出前にきてくださっていた中華屋さんなども、突然だったので、あんなに元気だったのに皆さん悲しんでくれた		
Fさん		悲しみに寄り添ってくれた葬儀に参加してくれた			
Gさん		パートナーの友人が来てくれて、お葬式も立ち会ってくれた			
Hさん	みんなでのたわりあう感じ。それぞれ悲しい思い	猫好きの友達が親身に話を聞いてくれた。自分の話も引き合いにし、慰めてくれた。ぽおの写真が見たいから、今度見せてね、と約束をした	ネット上での友達、動物病院からお悔やみ	息子の気持ちが気になった。死後はかいがいしく、ぽおのえさやり、水やり、お線香をたて手を合わせるなどをやっている。父が涙を流しているところを初めて見たかもしれない。死んで、みんな顔で拭いている時、しばらくして写真を整理してみんなが懐かしんでいる時等	
Iさん	何日も心配の電話をもらった。夫はずっと話をしていた	心配されて外に連れ出してくれた	あまり知らせていなかったの何もない	両親に何もしていないかも	

付録\_3 ロス後の感情 (Q15)

Aさん	亡くなる前から火葬までが辛かった。形が無くなることの恐怖。火葬までの4日間で思い出の場所を巡ったりすることで心の整理を付けた。火葬が終わって家の他の犬で気が紛れた
Bさん	亡くなる2か月前に日本に帰国した。日本に来てから急激に悪くなった。病気を見つけてあげられなかったことを後悔している。自分では「中国産のジャーキーに有害物質が入っていた、というニュースを知り、そのメーカーのものを食べさせていたのでそのせいで病気になったのではないか」と思い、後悔している。同時に楽になれてよかったとも思う
Cさん	亡くなる直前は、ついにきたか、との思い。覚悟のうえだった。カプリにこれまでの思い出をずっと語りかけていた
Dさん	ずっと後悔があった。死の直後は歩いていても、バスに乗っていても涙が出た。夜中に急に思い出し、涙が出て眠れない夜もあった。他に色々な治療の選択があったのではないかと。もっとしてあげられることがあったように思った
Eさん	手術の前日、やっぱり他の病院に連れて行けばもう少し早く手術ができて助かったんじゃないか、という思いはずっとある。どうしてあの日に手術してくれなかったんだろうとも思う。ずっと通っていた病院でしたが、大きくなりすぎてしまって、分業化されてしまったなあと残念に思った。会社の仕事、財政のことで長く悩んでいたこともあり、とろんの死後、頑張る気力が全てなくなった。何のために生きよう、とろんがいない世界なんてどうでもいいと思った。こんなにも自分の中でとろんの存在が大きいは思わなかった。いつ死んでもいい、もうとろんの側に行きたいと思っていた
Fさん	何も考えられないまま火葬を迎えた。日が経つにつれて残された犬と2番目のパートナーの悲しそうな顔を見るにつれ、現実なんだと実感した
Gさん	「もっと、やれることはあったんじゃないか」「変調のサインを単なる加齢のせいだと思って見逃してしまった」といった後悔の念。最初ママには勝てないな、とも思った(命日が、最初の飼い主さんと同じだった)
Hさん	あの時、こうしていれば、家に戻すように真剣に探していれば、結果は違ったかとも思う。猫の寿命を考えるとまだまだ長生きするはずだったので、悔やまれる。死んだ道を通るたび、ああ、ここで、はねられたのだな、と考えてしまう
Iさん	ずっと一緒に居たのにもういない。いてくれるだけでよかったのに

付録\_4 悲しみの反応 (Q16)

	P/N	反応
Aさん	ネガティブ	後悔。どの選択をすればよかったか、今でも後悔している
Bさん	ネガティブ	さすけに我慢させていたのではないかと後悔。楽になれてよかったとも思う
Cさん	ポジティブ	覚悟が出来ていたの、ある意味ほっとしているし、すっきりしている。楽にしてあげられたと思う。そして自分も看護から解放され、楽になった
Dさん	ネガティブ	最期が苦しかったのではないかと、安楽死の選択もあったのではないかと、ずっと思い悩んだ
Eさん	ネガティブ	丁度仕事が落ち着いている時期でもあったので、ほとんど寝ていた。起きる気力が湧かず、何もできず、1日のほとんどを寝て過ごし、どうしてもしなければいけない仕事のみをして、そしてまた寝るという日々を一ヶ月ほど送った。1ヶ月半ほど経った頃から仕事も忙しくなったので、ひたすら仕事だけをしていた。お化粧することもお洒落することも、お風呂に入ることすらも面倒で、約束以外は外に出ることもなく、ここから半年ほど、ほぼ引きこもり状態の日々だった
Fさん	ネガティブ	後悔。2番目のパートナーに負担をかけてしまった。なるべく考えないように、している
Gさん	ネガティブ	旅立った後のこじろうの顔(自分が第一発見者だった)や、ヘルニア発作を起こしたときのことを、夜、急に思い出し何もしてあげられなかった後悔で胸がざわざわして、寝付けなくなることがときどきある
Hさん	ネガティブ	後悔はたくさんあるし、息子の相棒でいてくれてありがとう、きっと生まれ変わってまた会えるよね、という気持ちもある。でもやはりポジティブではないかな
Iさん	ネガティブ	何もする気がなかった。何を見ても何をしても袖を思いだしてしまった

## 付録\_5 ペット死後の変化 (Q18)

	Q18-1.外的変化	Q18-2.内的変化
Aさん	あまり変わらない。他の子の世話で忙しく、気が紛れているのだと思う。小さい子がいなければ家で落ち込んでいたかもしれない	花がないことが不思議
Bさん	帰宅後の家、寝るとき、そばにいないのが現実になった	ふと思い出して泣く
Cさん	変わらない	変わらない。カプリのことを考えない日はない。ずっと好き
Dさん	仕事でも普通に笑ったり、しなければならぬのが辛かった。笑いたくもないのに笑い、泣きたいのに泣けない。しんどかった	バスの中で、外出中に、ふと思い出し涙がでた。散歩中のゴールデンを見るだけで泣けてきた
Eさん	半年間、約束以外は本当に外に出ない、近所に買い物すら行かないような引きこもり生活だったので、当然散歩などするわけもなく、見事に太った	親の死より悲しいとよく言われますが、本当にそうなんだなあと思った
Fさん	変わらない	後から迎えた子の健康に気をかけるようになった
Gさん	パートナーとは疎遠になりかけていたのだが、こじろうの介護で顔を合わせたり話す機会が増えたことでまた、仲良くなることができた。	こじろうのときは、「飼っているのはパートナーだし」という遠慮・逃げの気持ちがあっという間と手遅れになったこともあり、もう一頭いる後住犬には出来る限りのことをしてあげたいと思うようになった
Hさん	トイレ掃除を気にしなくてよくなった。ご飯も。ぼおのためにやることがなくなった	涙もろくなったかもしれない。常になんとなく考えてしまう。ぼおは幸せだったのか、ぼおの気持ちをついかんがえてしまう
Iさん	特にない	大切なものを失うということがこんなに辛いということが分かった。死に対し感じ方が少し変わった

## 付録\_6 子にペットを飼わせたいか、その際ペットに何を期待するか (Q20)

	P/N	ペットに期待すること
Aさん	ネガティブ	子どもがいないので、何とも言えない
Bさん	ネガティブ	期待することはない。今回のことは子にとっては勉強になった。大切な存在、お世話、命、死の現実。もし犬を飼いたいのならどんなことがあっても最後まで面倒を見るようになってほしい
Cさん	ネガティブ	今はない。命の面倒がみれるか、責任がとれるか、判断がつかない。命は重い。犬が介護になったらお金もかかることを考えなくてはならない
Dさん	ポジティブ	動物とともに暮らすことの恩恵、責任、を学んでほしい
Eさん	ポジティブ	子どもはいないが、もし子どもがいたとしたら飼いたい。いい相棒、きょうだいになってほしい
Fさん	ネガティブ	子どもがいないので、何とも言えない
Gさん	ネガティブ	子どもがいないので、何とも言えない
Hさん	ポジティブ	今回は不幸で悲しいことであつたが、人生様々なことがある。可愛がっているペットの生老病死もその一つ。それらを含めても、ペットと愛情をもって暮らすことは、生活に潤いや慈しみをもたらす、その恩恵は計り知れない。生物に対する尊厳、責任はもちろんのこと、日々の相互作用の中で、学ぶことは大きいので、子どもにもペットと暮らすことを選んでほしい
Iさん	ネガティブ	子どもがいないので、何とも言えない

付録\_7 心の支えになったもの (Q21)

Aさん	積極的	亡くなった犬が確かに存在していたこと。「花がいたから頑張れる」に変わった
Bさん	積極的	子の存在。物理的に忙しかった
Cさん	消極的	亡くなった後の生活を想像していたので特にない
Dさん	積極的	虹の橋の話、写真、肖像画など。忘れたくない
Eさん	積極的	御骨。分骨した骨をペンダント代わりにしていつも身につけ寂しくなったり苦しくなったりすると話しかけて、支えとしている
Fさん	積極的	写真、パートナーの存在
Gさん	消極的	残された人と犬の存在。自分がしょげている場合じゃないなと思った。後住犬は前より少し甘えん坊になったり、いろいろと気をまわしている間は、少し気がまぎれた
Hさん	積極的	写真や家族と思い出話をする。息子と共の写真が多く、懐かしく嬉しくもある。これがなかったら、記憶はどんどん薄れてしまい、忘れてしまう。息子の心の支えは、ロケットペンダントに入れた、ぼおのお骨。肌身離さずつけている
Iさん	積極的	家族(夫)の存在。夫と沢山話をして、思い出を話して話して泣いたこと。一人だったら無理だった

付録\_8 今どのような絆があるか (Q23)

	ペットとの絆
Aさん	お骨、ペンダント。写真を飾り、毎日話かけたい
Bさん	お骨、遺影。みんなで写っている写真。首輪、洋服は残している
Cさん	写真。生花はかかさない。お骨、洋服、リード、鑑札をとっている。鑑札は生きてきた証。ネックレスはいつも身につけて持ち歩いている
Dさん	二人でとった写真を飾っている。肖像画。死亡した日付けをメールアドレスにして、常に忘れたくない
Eさん	お骨の入ったペンダントを身につけている。写真を飾っている
Fさん	写真や花を飾っている
Gさん	写真を飾っている。前パートナーの写真と一緒に
Hさん	写真を飾っている。骨壺、ぬいぐるみ、ごはん、餌、お花、水を供えている。トイレもそのままにしている。ケージの扉に首輪をかけ、時々その鈴をならし懐かしんでいる
Iさん	写真を飾っている。一日に何度も話しかける

